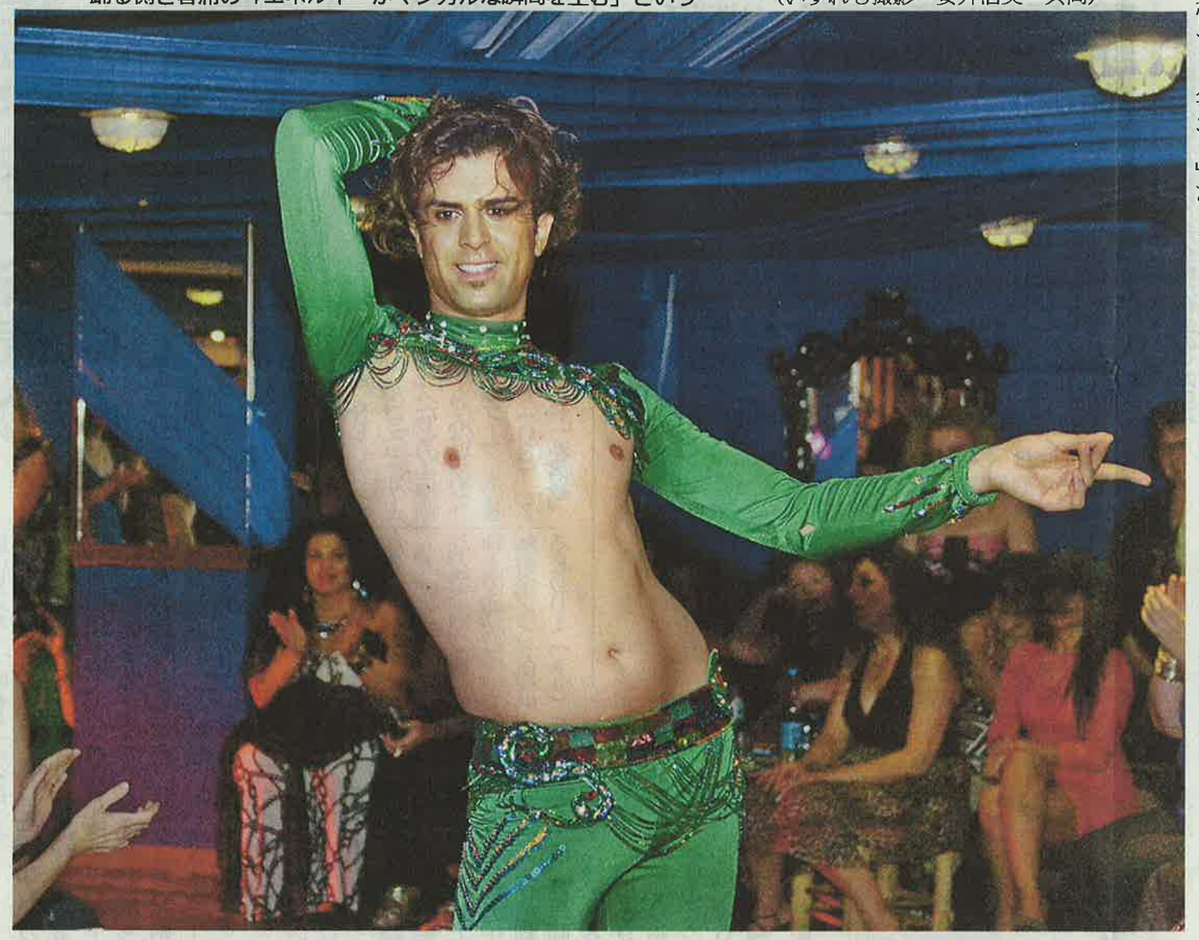
LOVE

地球人間模様

官能と悲哀の踊り

民族や宗教超え心揺さぶる

ロンドンの「プラネット・エジプト」で踊るオズゲン。一瞬で客席の注目を集め、会場の熱気を高める。踊る側と客席の「エネルギーがマジカルな瞬間を生む」という　（いずれも撮影・安井浩美＝共同）



トルコの弦楽器が切なく響き、長身を黒いガウンに包んだ31歳のオズゲンが舞台にふいに現れる。その一瞬で空気が熱く濃密になる。

ガウンを取ると、滑らかな上半身を見せるボレロのスパンコールがライトを浴びて輝く。

終わった愛をあきらめきれないアラビア語の歌に乗せ、女性的な曲線を描く指先。男性的でパワフルな腹部の動き。官能と悲哀。つかれたように客席の数百の目が追い、舞台と観客のエネルギーが絡み合う。

オズゲンは、ロンドンを拠点に世界で活躍するトルコ人「男性ベリーダンサー」だ。

丹精な横顔に栗色の髪、繊細な長い指。優雅で力強く創造的な表現スタイル。数千年の歴史があるといわれ、トルコでは「オリエンタル」と呼ばれるベリーダンスに心血を一途に注ぐ。

北キプロス・トルコ共和国生まれ。もの心ついた時から肩や腰を複雑に使う踊りができ、拍手がもらえないと泣いた。社会主義を支持する両親に連れて行かれた反政府デモの間も、踊る自分を夢想していた。難関の少年民族舞踊団の団員になり、各地で公演した。

大学ではメディア論を学んだが、ダンスから離れられなかった。卒業後は両親の反対を無視し、「才能があるかどうかは分からなかったけど」ダンスの道に進んだ。

イスタンブールで著名なミュージカルの出演者に選ばれ、ベリーダンスやモダンバレエを学んだ。ダンス学校でラテンや振り付けを指導したが、上司とうまくいかずに疲れ、ダンスを辞めようと思った。クラブに行ったり酒を飲んだり、若者の遊びもしてみたかった。

旅した欧州で分かったのは、トルコ音楽が深いところで自分を揺り動かすこと、生きていく上でダンスが不可欠なこと。ベリーダンスと、それをトルコに広めたロマ人のダンスこそが、自らの血に流れる表現方法であることだった。「最初からカリスマ性を備えてた」。オズゲンを見いだしたロンドンのライブハウス「プラネット・エジプト」のアン・ホワイトは言う。

「普段は内気」だが、舞台では自分を解放できる。聞こえるのは音楽だけ。アドレナリンが体を巡り、観客の拍手が耳に入らないこともある。

演技に満足したことはない。感動した観客の言葉や涙で、さらに高いレベルを目指し、踊ることへの愛が深まる。「セクシーなだけ」と見下す人もいるこの踊りの芸術性を認知させたいと願う。

ベリーダンスの人気が高い欧米各国や日本から、公演や講師、振付師として招かれ「人生の半分は飛行機の中」だ。

「だから恋人なんてできないし、友達も少ない」。だがアーティストとして満たされている。「観客から受け取るのは深くて大きくて、無条件の愛なんだ」。ふわりと額に落ちた前髪を左手でかき上げる。

「一人からは得られないスケールの愛だと思ってしまう」

それでも飛行機の座席や一人で歩く街角で、涙がこぼれることがある。振り付けのアイデアを得ようとカップルに恋の話を聞いたり、空港でキスと抱擁を交わす恋人たちを目にした後だ。踊るために手放したものを思う。でも「悲しみや孤独も、今は踊りで表現できる」。

心から愛する道を歩けているのは、複雑な歴史と政治に翻弄され、国際的に孤立した故郷に生きる家族の影響だとも思う。政治的な闘いに挑む一方で、平和や美の尊さを信じる両親や画家の伯父。人としての強さ、芸術的感性が身近に見えてくる。

エピローグ

「ベリーダンス」は体のすべての部位を使うダンスだ。その由来は「豊穣の女神への祈りの儀式」など諸説ある。呼称は西洋によるものだ。

エジプト、トルコなどいくつかの様式があり、米国では中東からの移民による新しいスタイルも生まれた。その人気は世界に広がり、女性を中心に支持されている。華やかな衣装も魅力だが「自分自身を愛せるようになるダンス」というのが人気の理由のようだ。

オズゲンは「瞑想やヨガに似ている」と言う。「忙しい生活の中で、ゆったりした音楽に合わせて自分に集中し内なる官能を確認する。男性にも女性にもいいことじゃない？」。ロンドンでは、レッスンに通う男性がここ数年増えたという。

男性ダンサーも歴史的に珍しくはない。かつて女性は男性の前で踊ることができなかったからで、オスマン帝国時代の細密画には男性ダンサーが描かれてい